

夏の終わりに(再会、そして別れの季節)

(九月十六日、日 パリ)

ベンチの上では余り、良い眠りは得られなかったものだが、加えて、殆ど一晩中、頭の中では一日間のセタンでの楽しかった思い出が未だに、ぐるぐる廻っている様だった。

お互いに流暢な英語を使いこなせる訳でもないのだが、意志の伝達は十分に伝わるので不足はない。時には、一生懸命に言葉を探しながら伝えようとする時の表情は、却って、可愛らしさが感じられる様な側面もあっただろうか。

「まだ、お互いに出逢ったばかりなのに、もう、別れの時が来るなんて……。寂しいよ!」

ブリジットの言葉が今も脳裏には蘇り、渦を巻いている様な気がする。

今朝は、再びパリ東駅に舞い戻って来た際に知り合った長井君と共に、ほぼ、一日中をパリの市内観光とした。

連れ合いが居ると、お互いに写真を撮りあったりするときは便利である。

ルクセンボーク公園、ノートルダム寺院、ルーブル美術館等を歩き回り、夕方近くには彼とも別れた。

セーヌ川の畔では、ベンチに腰を落として暫くの休息時にふと、思い出したことがあった。

そう言えば、三年前の五月の頃に、日光東照宮の参道で声を掛けられて知り合った二人のフランス人女性の内の一人、エバの住所は、確か、この近くだったな。

それと、『せくしゅフランス』に来られる機会がありましたら、是非、連絡くださいな。』とのメッセージ



ージと連絡先の住所を貰っていたのだが、直ぐ近くのようなので、序のついででもあり、ちょっと顔を覗かせてみようかなと、ふと、思い付いたものだった。

住所の番地を見比べながら、少々歩き回った処で、その石造りのアパート建物には容易に辿り着くことが出来たのだが、只、郵便受けの表札には彼女の名前は見当たらなかった。

丁度のタイミングで、入り口付近で出会った五十代後半位かと思える女性に彼女の名前を出して訊いてみたものの、知らないとの返答。

多分に、二年前の彼女達にとってみれば、二人での卒業旅行だった様であり、初めての日本旅行の最終日に日光東照宮に観光で訪れていた際に、参道の石垣に腰掛けていた私に、

「一緒に、良いですか？」

と、たまたま、声を掛けて横に座ってくれたことで知り合ったものだった。

代々木ユースホステルに宿泊していて、翌日には、羽田からの夜の便で帰国するこの話だった。

当時の訪日外国人旅行者数と云うのは中国を含めたアジアからでは皆無の時代であり、欧米からの旅行者にしても、まだまだ少数の時代ではあった。しかも、若い女性二人だけの欧州からと云うのは珍しい程のケースでもあったので、周りには俄かにカメラマンが集まり、多くの写真を撮られて、後には住所を聞かれて、多くの写真が送られても来たものだった。



そもそも、私が欧州旅行への関心を抱くに至った原点の一つには、この日光での彼女たちとの出逢いの影響と云うのも幾らかは有ったろうかと云う気はしないものでもなく。

ロバートのパリ・セーヌ川近くのアパートでのすれ違いと云うのがお互いの永遠のすれ違いと云うことになるので、人生上での縁と云うものは、人知の及ばない処での細い糸が繋がっているのか、いないのか・・・と云った様な処なのかも知れないだろう。

まあ、想像してみれば、卒業してから三年も経てば、それ迄のアパートからの転居と云うパターンはフランスに限らずとも普通のことであるだろうから致し方ない。

さて、パリの空気が十分に満喫した様にも思えるので、今夜の夜行では何処か、他への移動をしたいものとパリ東駅に舞い戻って来た。

時刻表の掲示板を追っているところ、今夜の車中泊用としては適当そうな列車がスイス方面行きであったので、それに乗ることにした。

ではあったが、こじんまりしたユースなので、経営上ではそんなに楽でもないのだろうが。

宿泊客は、この二人のアメリカ人女性と、同じく二人のアメリカ人男性と一人のフランス人女性。それに、私を含めての六人だった。

部屋は二段式ベッド二組の四人定員で、二人のアメリカ人青年と私での三人相部屋だった。

「やあ、おしはステイーブだ。会えて嬉しいよ。」

「やあ、サトルです。おしも嬉しいよ。君はどちらからっ？」

「アメリカ。君は？ 日本人かな？」

「そう、日本から。イギリスをヒッチハイクで一周した後には北欧を周ってから南下して、あちこち彷徨いながら、今夜ここに辿り着いたって処だよ。」

「色んな所に行ったんだな。何処が良かったかな？」

「三日前には、フランス北部のセダンという小さな町で六人姉妹の長女との出逢いの機会があったよ。町のあちこちを案内してくれて、夜にはバブにも誘ってくれた。家族の皆さんにも歓迎されて、食事と宿までお世話になった。素敵な女性だったよ。」

「エッ… そりゃあ、凄いなあ…羨ましいぜー。だけど、なんで…？ びっしょりそのまま、直ぐ出て来てしまったんだ？ おしには理解が出来ないよ。折角の機会を生かさないなんて…。おしだったら、そのまんまに居座って、長居を決め込んでしまっただけじゃあない？」

「……」

なるほど…。言わねえか、何と返して良いものか、一瞬の戸惑いがあり、二の句に詰まっってしまったものだった。

確かに、大変貴重な機会と云うのか、大きな鯛を釣り上げて、手を伸ばし、触れた瞬間に糸から外れてしまった様なものだろうかと…。

一抹の後悔の念も湧いて来たので、パリからの帰国便の前日迄には、もう一度、再訪してみようとの思いに至った。

() 九月十八日、火 チューリッヒ ()

朝の八時過ぎ、下段のステイーブに起きを促されて、降の空から降の空、外は朝から



の雨模様だった。

天気が良いければ、ツェル
マット観光にでも足を延
ばしてみようとの思い付
きではあったのだが、山
見物どころではなさそう
な天気だ。

何処に赴いて過ごしたも
のか…。

ともあれ、インターラー
ケンの駅前の商店ではブ
リジットと妹たちへの再
訪へ向けての細やかな土
産品を買った。

荷物が増えたので、背中の
リュックがさらに重くなっ
た。

また、売店では絵葉書
も買ったので、日本の友人
知人たちへと、そして、ブ
リジット宛にも

「後日の二十一日に、もう
一度立ち寄りますから」
との内容で出しておいた。

ツェルマット観光は諦めざるを得なかったもので、この後の夜行では、スペインのマドリッドかバ
ルセロナ辺りにでも向かったものだろうとかとの思案中ではある。

(九月十九日、水 パリ〜ローマ)

昨夜には、一旦、シエナバに出でて、それから一気にスペインへ…との発想ではあったのだが、結
局のところ、睡眠時間に充てる便の時間都合で、またしてもパリへと舞い戻ってしまったものだ
った。

そもそも、予定というのは全くないのだから、只、単に、時刻表の次第で行き先も決まると云



った処ではある。

パリへ舞い戻って来たからには、さらに、今日の一日はパリ市内の観光と云うことにした。

取敢えずは、背中の重い荷物をロッカーに預けてから、ハミリカメラを手にして街に出る。

リヨン駅からセーヌ川沿いへと歩いて、ノートルダム寺院、カルチエラタン、ルクセンボーク公園などをフィルムに収めながら歩いて周る。

その後にはエッフェル塔に向かい、第二展望台まで上がって市街を見下ろしての気分は格別であった。

続いては、凱旋門から、さらにはシャンゼリゼ通りを歩いてから地下鉄でリヨン駅までを引き返した。

さて、この後には、少々無理をしても、先日のナポリまで足を運んで、郵便局窓口の人にカメラを売り払って来ようか、それとも、タイムリミットを考えると、無理をせずに、早めにユースにでも落ち着いて、翌日午後の便でセタンへ向かうのが無難だろうかの迷いがあった。

折角、売ってくれと懇願されているのだから、ここでは、売ってお金にしたいと云う願望と、時間的な計算ではナポリ迄の往復が大丈夫だろうかとの不安との迷いである。

なかなか、決めかねては居たのだが、つい、列車の発射時刻が迫っていたので、思わず、ナポリ行の列車に飛び乗ってしまったものだった。



乗車はしたものの、列車が動き出すまでの間、そして、動き出してからも、果たして、ナポリ迄の往復には間に合ったのだろうかとの不安がいつまでも付きまとい、逡巡していたものだった。

ブリジットには、先のインターラーケンから出した絵葉書の中では、次回のセダン駅への到着予定を二十一日の午前十時着予定とは書いて知らせてある。

列車が走り出してからモンツワフについて落ち着かないので、窓外の景色などを眺めている余裕も無い様なものだ。

移動中にもずっと、ナポリ迄の往復時間の計算をしながら、オロオロしてはいたのだが、結局の処、結局しても、危ういかも知れないとの結論に至ったので、途中ながらも、ナポリ行を諦めてローマで降りて引き返すことになった。

（九月二十日、ネローマ〜）

お昼過ぎ頃には、ローマ駅に再到着した。

カメラを売るためにナポリ迄行くのを断念したので、ここで下車しての折り返し便までには四時間程度の時間しかないのだが、取敢えずは両替をして、荷物をロッカーに預けて街に出て、古代の遺跡などを散策してみることにした。

ローマからは、一度一週間前にリュレリッヒェから乗車した時の同じ便に乗車すれば、予定時刻の翌朝十時にはセダンに到着できる筈だろうとの計算である。

サンタ・マリア・ア・マッジョーレ教会やディオクレティアヌスの浴場跡等とその周辺を少々歩き回ってから駅に舞い戻って来た。

何しろ、ブリジットへの明日のセダン駅への到着予定時刻については、インターラーケンからの絵葉書に書いて出しておいただけのことであり、それが確実に届いていて、既に、先方での了解事項であるのかどうかについては確認のしようが無いのであり、果たして、大丈夫だろうかとの多少なりの心配事ではある。

もし、その時の迎えが来てなかつたら、自力で彼女の自宅迄に辿り着くのは、おそらく無理だろうから、この不安である。

夕刻五時半頃のフランス



方面行きの列車に乗車した。一週間前と同じ列車の筈だろうとの計算ではあった。

(九月二十一日、金 〓セタンへの難行)

さて、朝を迎えてから、そろそろ午前十時近くになって来ていたので、もう暫くの内にはセタンの駅に無事に到着だろうかと、窓外の様子を眺めていたのだが、どうも、様子が変わった。

停車駅の表示と地図との確認をしていた処、どうやら、列車は既に、ルクセンブルクを過ぎて、ベルギー内へと入っている様子だった。

(何だ、これは…？ 一体、どうなってるんだ？)

つまりは、ローマから乗車した便は確かに、一週間前にフィレンツェから乗車した時の同時刻の便だった筈との思い込みではあったのだが、途中、フランス北部のティオンヴィルでは車両が二手に分かれての走行になっていた様だ。

新宿からの小田急線では、相模大野での江の島方面行と小田原方面行とに車両が分かれる便が有るのだから、そう云うことだったのだろうか…？

そろそろブリジッタはセタンの駅に迎えに来てくねるかも知れないので…。
大変なことになってしまった。

仕方がないので、次の駅では下車して、取りあえず、ルクセンブルクまでは引き返したものの、セタン方面への便と云うのが十七時以降の夕方まではなかつた。

次第に、冷や汗が出る様な焦りはかりではあるが、取りあえずは、車両が二手に分かれたティオンヴィルまでを引き返してみた。

然しながら…。「泣き面」を「騒」を云うのは、好いことと云うものだろうが、不運な時にはさらに悪いことが重なるものだろう。

セタン方面への列車の便が無かったというか、駅窓口で問い合わせたところ、先の国際列車は動いていったものの、

「今日はフランス国鉄がストライキ中なので今は国内便は動いてないのです」との応答。

「え〜〜〜… そんな〜。 大事な約束があると云うのに…。」 何と云うひどい話だ！

偶然に起こる運の悪いことばかりがこしも重なるものだろうかと、心中穏ならざる事態となっ
てしまったものの、小生の個人的な力では如何ともし難い。

「何時頃には動くのか？」

「いじめなさい。今の段階ではまだ、判らない状況です」

「何〜…。」

何時頃には動くのか？。まだか、まだか何度か訊き直した処、さちが明かない様な話ばかりではあった。そして、漸くには「十九時半頃には動く予定です」の回答が来た。

これではセタンへの到着が遅くなり過ぎない。もう一つあったら、最後の手段では「タッチアップ」か

ないだろうかと、駅外に出て、暫くはトライしてみたものの、余りの反応の悪さに断念して駅舎に引き返した。

そもそも、駅前みたいなのからではタクシーじゃあるまいし、捨てる訳もないのだから、イギリスとは違って、英語では話が滅多には通じないのだから余計に無理も無いんじゃないの。再び、窓口を引き返しては色々と問い合わせてみた。

「十六時二分のTEEを利用してルクセンブルクに出れば、そこからは十七時半のセタン方面への便がありますよ」

「では、それで……」否、そうは思ったのだが、TEEの料金表を確認すると、極貧の放浪者にとっては想定外の料金だった。やむなく、それは諦めることにした。🙄

結局のところ、セタン井戸は、あと一歩という所まで近づいたものの、それ以上には進めそうにないので、取りあえずは、ブリジット宛に電報を打つことにした。

「斯く斯くしかじかで、前に進めない状況なので、また、後で連絡します」と。
殆ど一日中を右往左往しながらの立ち往生となってしまったものだった。

漸く、また、窓口での説明を得るようが出来た。

「十八時十五分のバスでアマンジユンへ出れば、そこから十九時二十九分発のセタン方面列車があります。それに乗れば、セタンの駅には二十時五十四分の到着予定になります」
この説明があった。

取敢えずは、漸く、到着の予定時刻が判ったので、ティオンヴィルの郵便局からは再度の電報で緊急連絡を入れておいた。

「到着予定時刻が二十時五十四分になりました」と。

だが、実際にはセタン駅への到着はさらに、十六分程の遅れで、二十一時一〇分であった。

この程度の到着時刻の遅れと云うのは、日本以外の国では日常的にも良くあることなのだろうが、当初予定からでは、何と、約十一時間を超えての到着遅れとなっていましたものだった。

セタンの駅に到着して改札を出ると、ブリジットとお父さんと妹(次女)のエークの三人が迎えに来てくれた。

到着時刻が夜遅くの時間帯になってしまったので、お父さんも一緒に同行して下さったのだらう。

一週間にインターレークンから出しておいた絵葉書での連絡では、過日の機会と同じ列車を利用するのでセタン駅への党で着予定が午前十時位になると連絡してあったので、もしかしたら、午前にも迎えに来てくれたのだから……。本当に大変な迷惑を掛けてしまったものだが、何と、内心、恐縮していたものだったが、皆さへ、一汗の不快な気配さえも感じれば、何と、快く、やかに歓迎のハグで私を迎えてくれた。

何と云ったら良いだろうか……。

まで繰り返すんだよ!! 解
ったのかな!!」

ともあれ、右講義と練習
の後に、漸く…。

「よし、それでは、今度は
本番だよ。やってみよう。

はい! ジャンケン・ポン!
アイコでシヨッ! アイコでシ

ヨッ!

取りあえずは、一人か二人
が勝ったような結果内容で
はあったのだが、その結果に
は関わりなく、その直後の瞬
間には妹たちの四人が同時
に手土産品に手を出して取り合った。

まあ、まだ、躰も何もしたことのない子犬たちに、エサを前にして「待て!」を教える時の様な
ものかも知れないのだろうし、私もフランス語での説明が出来ないので仕方ないのだが、まだ、
小学生のエブリン、ジャスリンに至っては特に、私の下手な英語も殆ど通じてなかったか、説明の
理解も今ひとつだったのかも知れないだろう。

ともあれ、彼らにとっては生まれて初めてのジャンケンゲームではあったものの、結局の処、ジ
ャンケン・ポンッとやった瞬間には、勝敗の結果には関わりなく、「キャッ!」と云う叫声とと
もに、皆が同時に鼻品に飛び付いてしまった。審判員の私としては、誰が何を出したかの判別
さえ付かないままに、ぐさぐさの中での早い者勝ちと云うあやふやな結果になってしまったの
だ。

ジャンケルールの事前説明での成果は、殆ど、意味をなさなかった様だが、まあ、それぞれの
手に収まってしまった以上、今更、如何とも調整は難しい。致し方ない処だろう。

只一人、冷静沈着な二歳のアレンは、傍らで冷やかに眺めていたのが愛嬌だろうか。
お父さんとお母さん、それにブリジットはその場の光景を見ながらの大爆笑であった。

女三人寄れば何とやら、という古い言葉が昔の日本ではあったものだが、年頃の女の子達が
四人で争うともなれば、それは、それは大変な賑やかさであり、家中が大変な盛り上がり様であ
った。

実の処、お土産品とは言っても、資金力も無かった私においては、ホンの細やかなもののだが、
皆さん、大変に喜んでくれた。



妹たち全員からの類に感謝のキスを受けたものだが、これ程に若い女性達からのキスの洗礼を受けた体験と云うのは人生上でも一度限りの、最初で最後のことだろう。

いやはや、何とも賑やかなものであった。

お父さんには、私が唯一持参していた赤系のネクタイを差し上げて、お母さんには、やはりインターレーケンで買った細やかな品を差し上げた。

人は不幸の中にいる時には、その不幸と不遇を満身に感じ取れるものだが、幸福の中にいる時には必ずしも、その幸福感には気付かずには過してしまっていることも有るのかも知れないだろうか。

お父さんの言葉の中からは、「いや、フランスでは物価も高いから生活も楽ではないよ」という様なジョーク気味な愚痴もチョロツとは耳にしたが、成長盛りの六人の娘たちを抱えてのそんな大変な状況の中でも、家族にとっては今が一番幸せな絶頂期だろうかと感じたものだった。

（ 九月二十二日、土 別れの時 ）

翌日には、朝から二人で街中を少々歩き周りながら植物園に立ち寄り、お互いの写真を撮ったりした後に再び、先日の湖の畔にやって来た。

風光明媚で落ち着いた雲田気があり、若い男女が一人で時間を過ごすには最適な場所だろう。

「ここは綺麗な所だよねえ。素晴らしいところよ。」

「どう云う所はお好きなの？」

「うん。大好きだね。少年時代を過ごした所は海と山が近くて、こんな風に広々とした平地は無かったけど、静かで、海に浮かぶ島々の風景が綺麗な所だったよ。だから、こんな所では長い時間座してこの風景を眺めていても全然飽きないんだよ。」

「あ、時間がめっちゃ有りたらい良いのだね。」

「そっちなあ。昨日は朝の十時頃にはセタンに着くと思っていたんだよ。だけど、まさか、列車がストライキで動いてないなんて云うのは想像もつかなかった。あー、早く来れば良かったと後悔してるんだけど……。運が悪かったよ。」

「明日の飛行機は何時になるの？」

「オल्लीから午前二時一〇分発になる。日本から戻らば来る時は北極回りだったけど、今度は南回りの便だね。」

「折角、逢えたのに、時間が短かったよね。残念だわ。」

「うん……。僕も残念だよ……。今夜にはパリに着かなきゃならないんだから……。帰りの切符を売ったり、日程の変更が出来るとは思わなかったら、あー、一週間へんがせよと延滞していたんだけどね。」

「サトル……」

「……」

「○×△×□×○……。」
「……………」

暫くは、静かな時が流れていたようだった。
ふと、顔を上げた時にひと言葉があった。

「サトル…」

「…」

「このブローチはねえ。これ迄、いつも私が身に付けていたものなのよ。だけど、今日は、これをあなたにあげるわ」

「エーッ。そんなに大切にしていたものを僕にくれるの？ いいのかな？」

「うん。これを私だ

と思ってるくれた

ら嬉しくな

「エーッ。ありが

とう。大切にしますよ。

君との思い出…」

「じゃあ、首に掛けて

あげるからね。ハ

イ！じゃあ、目をつ

ぶいて…」

♡♡♡

お昼過ぎには、いつ

たん自宅に戻り、お

母さんのご用意頂い

たランチをご馳走に

なり、暫くの時間を

家で寛いだ。

「今夜はパリに着い
たらホテルにチェック
インしたいのよ、一週
間前の時よりは少し
早めの午後五時位の



列車には乗ることにしようかな」

「分かったわ。駅まで送って行くからね」

と云いつつ、一週間前の時分には一時間へび早くブリジット付き添いで家を出た。午後四時頃にはセダンの駅に着いた。

一週間前と同じホームの同じベンチに二人で腰を下ろす。

何とも言えない様な、もの悲しくて寂しい様な空気が流れていた。

列車を待つ間には、彼女からのお別れの熱い抱擁とフレンチキスには身を任せながら、彼女の温もりと息遣いが静かに伝わってくる。

やがて、ひと時程を過ぎた頃に、ホームにはパリ行の特急列車が入って来た。

最後の別れのハグとキスを交わした後、「デッキから列車内へと入った。

窓側の席に座り、窓を開けると、お互いに何かが込上げてくる様な気配があった様だ。

定刻になると、列車はホームから滑る様に動き出した。

「サトル……」

「ブリジット…オルボワール…」

お互いの名前を一度つつ呼びあったのが最後の会話となり、別れとなった。

一週間前と同じ光景ではあるのだが、いつもまでも、いつもでも、見えなくなるまで彼女はホームで手を振っていた。

前日には気持ちの良い天気だったが、やがて、窓外には何日ぶりかで振り出ししてきた雨が次第に強く、激しくなっていた。

パリ行の特急列車は次第に加速を増し、烈しい風雨の中を全身全霊、全力で疾走している様な気がした。ピシピシと激しく音を立てながら車窓に打ち付ける雨足の雫たちは、先を競い合う様に斜め後方へと走り、流れ行く。彼女の頬に伝う涙の様にも思えた。

「アイム・ビティ・ナウ」と二度程つぶやいていた彼女の言葉がいつまでも耳奥に



残り、こたましている様だった。

（あの後、この強い雨の中を、彼女はとうやって帰宅出来ただろうか…。濡れなかっただろうか…。そつだ、タフシーで帰ったんだらうな…。）

色々と心配な気持ちだが次から次へと過っていた。

そらば、フーシシット。

短い時間だったけれども、楽しい沢山の思い出をありがとう。

窓外では稲妻の閃光が鋭く光り、走り出していた。

「サトルよ、この夏は、もう、終わったんだよ。過ぎ去った過去は、もう一度繰り返されることは無いんだよ」

天上の何処からだったのだろうか、誰かの声で告げられた様な、無かった様な…。否、気の性だったのだろうか…。

前編
完